

## 愛、すべてを完成させる絆

### ヨハネ13:31~35 / 李正雨師

今日、私たちに与えられた福音書は、「さて、ユダが出て行くと」という言葉から始まります。外に出て行ったイスカリオテのユダは、自分が計画したこと、つまりイエス様を裏切ることを進めます。イエス様をサンヘドリンというユダヤ民族の最高法院に渡し、イエス様は、サンヘドリンの決定によって十字架につけられるのです。ですから、彼が出て行ったとは、イエス様の受難と死が始まるという意味です。イエス様はこのことがお分かりになったので、ご自分の受難と死の前で弟子たちに今日の福音書の言葉を伝えられます。ご自分の死を前にしたメシアの説教。これが今日の福音書なのです。今日の福音書は、3つの部分に分けることができますと思います。栄光、別れ、愛です。まず、栄光の部分を見てみましょう。31~32節の言葉です。

「さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。『今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。』」

#### \*栄光

イエス様は、ご自分に起こる死は栄光だと言われます。イエス様のこの言葉は、私たちの世界では理解しにくいことだと思います。この世での栄光というものは、成就と支配と成功を意味しているからであり、これらのことは生きているうちにだけ成し遂げられるものなので、この世での死が、栄光になることはあり得ません。私たちのことわざの中でも「命あつての物種」という言葉があるほど、死というものは避けなければならないものなのです。しかし、イエス様はもうすぐ起こるご自分の死を栄光だと言われます。そして、ご自分の死によって神様が栄光をお受けになり、神様もご自分に栄光を与えてくださると言われます。どうして死が栄光になることができるのでしょうか。イエス様の死が栄光になることができたのは、この死がご自分のためのものではなかったからです。イエス様の死は、隣人のための死であり、他人のための犠牲でした。そしてこの犠牲は、イエス様の愛に基づくものでした。ある目的があつて犠牲にしたのではなく、愛するから犠牲にしたのです。まるで、親が子供のために自分のことを譲って犠牲にするようにです。先週の主日は母の日でしたが、母になる過程は、簡単ではないでしょう。皆様もよくご存知のように、身ごもったら体が重くなり、それによって体調も悪くなります。私の妻は、妊娠するたびに妊娠性糖尿病を患いましたが、そうなると食べものも、調節しなければなりません。子供のために最も基本的な欲求を耐えなければならないのです。子供を産むといっても、それで母親の仕事が終わったとは言えないでしょう。乳を飲ませ、寝かせ、泣いている子供をなだめるためには、ずっと抱かなければなりません。腰が痛くて動けなくなっても、母は自分の子のために犠牲にします。この聖なる犠牲には、目的や目標はありません。子供を愛する心、これが母が自分を犠牲にする理由のすべてです。

イエス様の犠牲も、これと同じだと思います。イエス様はこの世を愛され、ご自分に従う人々を愛されたので、十字架を背負われました。そして、神様はこれを栄光にしてくださいました。この世では、このような愛と犠牲を栄光だと認めていません。当時のイスラエルやローマ帝国でも、今の私たちの時代でも同じだと思います。この世では、十字架での死よりも帝国の王座がより栄光なことなのでしょう。しかし、神様はこのイエス様の愛を栄光としてお受けになり、イエス様にも栄光をお与えになりました。そして、この栄光のみを通して、私たちに救いを与えられました。帝国の貴族や皇帝になっても、誰よりも高くなっても、神様の栄光になることはできません。ただキリストの愛だけが神様の栄光をもたらすことができるのです。

## \*別れ

イエス様はこの話をなさった後、弟子たちと別れることを言われます。ご自分が行く所には、弟子たちは来ることができないと言われます。一見読むと、この言葉はイエス様の死による別れを指しているようです。死は、イエス様と弟子たちを別れさせることになるからです。しかし、イエス様はこの別れが長くないことを言われます。今日の福音書の後の箇所であるヨハネによる福音書14章3～4節で、イエス様はこのように話されます。「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」イエス様は、弟子たちとしばらく別れる理由について教えてください。弟子たちが永遠に住む場所を用意しに行かれるのです。そして、このことを弟子たちは知っているはずだと言われます。弟子たちは、イエス様からご自分の死と復活について何度も聞きました。しかし、当時の弟子たちは、イエス様のこの話を理解できなかったと思います。なぜなら、弟子たちの頭の中は、神様の栄光ではなく、この世の栄光に満たされていたからです。弟子たちは、イエス様は自分たちに帝国を与えられ、自分たちの立場を高めてくださるだろうと思いました。しかし、このような思いは、すぐ変わるようになるのです。イエス様の死によって、またイエス様の復活によって、本当に栄光が何なのかが分かることになるからです。そして、その栄光がイエス様の愛を通して示されるということも分かることになるでしょう。

## \*愛

イエス様はこの世の栄光だけに夢中になっている弟子たちに愛について語られます。今日の福音書34～35節の言葉です。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」実は、互いに愛し合いなさいという掟は、律法の掟の一つでした。旧約聖書、レビ記19章18節にはこう書かれています。「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」ところが、なぜイエス様は、これを新しい掟と呼ばれたのでしょうか。それは、イエス様の言葉の中に「わたしがあなたがたを愛したように」という言葉が入っているからだだと思います。レビ記の言葉での隣人は「民の人々」、つまり同じユダヤ人だけを指しています。律法というものは、ユダヤ人にしか与えられなかったことなので、隣人には異邦人が含まれていません。しかしイエス様は、ご自分の愛をユダヤ人だけに与えられたものではありませんでした。ユダヤ人だけでなく、サマリア人、シリア人、フェニキア人、デカポリスの人々にも福音を伝えられ、彼らの病気も癒されました。そして、ユダヤ人だけではなく、みんなのために十字架につけられました。すなわち、イエス様の救いは、一つの民族のためではなく、すべての人のためのものでした。神様はこのようなイエス様の愛を栄光としてお受けになり、イエス様はこのような愛が弟子たちの新しい掟だと言われたのです。使徒言行録1章8節で、復活なさったイエス様はこう言われます。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」イエス様の愛、神様の栄光は、すべての民族に与えられたことなのです。

愛する皆様。私たちがイエス様から頂いた愛は、このような愛であり、私たちはこの愛によってつながっています。そしてこの愛は、私たちの信仰のすべてを完成させるのです。私たちの教会生活、奉仕、善い行い、交わりも、この愛が導き、最後に私たちは、この愛によって救われるのです。そして、この愛の中にいる人々は、みんな神様の栄光になるのです。キリストの愛が私たちに満たされますように。この愛はいつまでも私たちに導いてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン